

# 特定地域を対象とした通信による支援者支援の試み - 鹿児島県名瀬市と長野県飯田市の場合 -

平城 真規子

## 0. はじめに

文化庁委嘱事業「中国帰国者に対する日本語通信教育（試行）」の中の取り組みの1つとして、中国帰国者定着促進センター（以下所沢センター）が特定地域と結んで進めた「特定地域対象プロジェクト」では、当初次のような目的を定めていた。

・学習機会の比較的乏しい地域に暮らす帰国者等のおかれた環境を探り、その支援方法の一つとして所沢センターが地域の支援者に対し、通信を主たる媒体とした情報・資料・助言等のサービスの提供を行い、地域の支援者による日本語学習環境の改善に寄与する。

試行を通じて、特定地域を対象とする支援者支援のモデル例を作る。

試行を通じて生み出された支援方法や支援材料を評価し、将来の活用に向け改善点を整理する。

本稿では名瀬市および飯田市における試行事例を報告する。

なお、地域で活動を進める支援者グループに対し、所沢センターが通信による支援を行う場合、関与の度合いは大きく以下に分けられる。

- (1)核となるグループが未形成またはグループの基盤が不十分である場合、所沢センターはキーパーソン<sup>1)</sup>との間で密なる連絡・連携を行い、支援リソースの掘り起こし、企画立案、支援活動など全般を通じて深く関与する。
- (2)核となるグループ・組織は存在するが、自ら支援活動の企画をするまでには到らない場合、所沢センターは主にその企画作りを援助する。
- (3)核となるグループ・組織がすでに自律的に支援活動を企画実行している場合、所沢センターの主たる役割はその求めに応じて情報・資料の提供や助言等の側面支援を行う。

名瀬とは主に上記(1)、飯田とは主に上記(2)の関わり方でプロジェクトが進められた。

## 1. 名瀬市住民との連携 協力による支援の試行

### a. 支援者支援を行うことになった経緯

1996年10月、M氏（市職員 / 日中友好協会員）の所沢センター見学を契機に所沢センターとM氏との間で名瀬の帰国者事情について情報や意見の交換がはじまった。1997年3月、所沢センターはM氏の友人であるS氏（市職員 / 日中友好協会員）に本プロジェクトへの参加協力を打診した。プロジェクトの受け入れ先は名瀬市日中友好協会に決定したが、当協会は設立後日が浅いため組織としての機動性の点でやや非力であるとのことで、実質的にはキーパーソンのS氏を中心として協会員であるボランティア数名が名瀬側の支援メンバーとなった。

### b. 地域及び帰国者の概況

名瀬市は奄美大島の北部に位置し、面積127.95平方km、人口約44,343名（95年10月現在）、奄美地方の拠点都市である。

奄美地方では近年観光と並んで基幹産業の一つであった大島紬産業が衰退化し、新たな産業の開発を含め地域の振興が課題となっている。その中であって名瀬市は商店や銀行・官公庁等が集中し、奄美全土から買い物に集まる者も多く、奄美地方の牽引車的役割を担っている。

名瀬市の中国帰国者等の総数は144名（1997年10月現在）総人口の0.03%で、ここ数年呼び寄せ家族の増加が続いてきた。

### c. 支援者支援活動の記録

#### c-1. 状況の分析と支援者支援の手順

公的学習支援について

・公民館日本語教室（鹿児島県自立研修センター分室）が運営されている。

クラス数：1 / 頻度：週2回 / 対象者：小中学生、青年、大人

講師：自立指導員

・なお極めて特殊なケースであるが、国費帰国者はすべて定着促進センターを経ず直接名瀬市に定着している。

その他支援状況について

1997年4月時点でボランティアによる日本語教室は確認されていない。

・本プロジェクトの名瀬側メンバーがボランティアとして、年1～2回帰国者やその家族を対象に交流会を企画している。（一般の日本人不参加）

・帰国者等の自助組織として95年に発足した「引揚者の会」は休止状態である。

名瀬地域の概況把握を進める中、同地域では「支援リソースの開発による新たな支援活動の取り組み」が課題であるとの認識から〔表1〕のような支援手順を想定した。

表1 想定される支援の手順

(1)状況分析	地域の概況把握 / 支援の概況把握 / 支援リソースの概況把握 / 中国帰国者等および外国人の概況把握 / 学習者把握（ニーズ調査）
(2)目標設定	人的リソースの掘り起こし / 物的社会的リソースの開拓 / 学習機会の提供
(3)支援計画の作成	学習者ニーズと支援者ニーズの調整 / 支援プランの検討
(4)支援の試行	教材提供および学習相談サービスの提供 / 支援者研修
(5)支援の修正	学習者支援者双方からフィードバック情報の収集・検討・修正
(6)支援の拡大	支援者公募 / 学習者公募

## c - 2 . 活動の経過

### ア . 状況分析

#### ア - 1 . 「中国帰国者等及び定住外国人との交流を考える集い（1997年8月）」

上記手順(1)状況分析の「支援リソースの概況把握」のうち人的リソースの把握のための一手段として、一般市民向けに参加を呼びかけた集いを開催した。これは同時に手順(2)の人的リソース掘り起こしにも結びつき、集いの終了後、多言語交流を行う会のメンバーをはじめ数名が支援者グループに加わった。

#### ア - 2 . ニーズ調査（1997年9月～10月）

## 調査の目的

・中国帰国者等（成人）の主に日本語に関する学習のニーズを知る  
・学習ニーズに関わる生活と学習の実態を知る

その他調査の詳細については（紀要 6 号平城1998）を参照されたい。

## 調査結果のまとめ

幼児や学齢の子を持つ若い婦人層には、家事育児の合間を縫って学習を続けたいとの潜在的なニーズがある。

主な学習目的は、子供の保護者の役割を果たすことを含め日常生活での問題解決能力を養うこと、また生活レベルの向上である。

自己のレベルやニーズに合った適切な教材や学習上の支援者（あるいは身近な学習の場）を求めている。

・日本人の知人・友人を求めている。

自動車運転免許試験の対策など免許・資格取得に関する対訳本の開発や情報提供を求めている人がいる。

## イ．目標設定

ニーズ調査も含め状況分析の結果を参考に、次のような目標を設定した。

### (1) 支援リソースを豊かにする

...多様な学習ニーズに対応するために、住民の中から支援者を募ることを含め、支援リソースの開拓・再編に努める。

### (2) 中国帰国者等のうち、幼児・学齢の子を持つ婦人（専業主婦）を主な対象に支援を行う

...若いため潜在的な学習能力が期待でき、社会的見地からも学習必要の高い幼児児童・生徒の保護者に対する支援に取り組む。その際、無理なく学習が継続できるように学習の場や学習形態を検討する。またテキストを媒介とする狭義の日本語学習だけでなく、交流活動や実地体験を含め、広い視点から学習を捉え直す。

### (3) 高校受験を控えた帰国生徒の教科学習を支援する

…本来は児童生徒全体を視野に入れた支援策が必要だが、緊急性という点から受験期の生徒への支援に優先的に取り組む。

## ウ．支援活動計画の立案と試行

### ウ-1．前期（1997年11月頃～1998年7月頃）について

名瀬の支援者グループはグループを構成する日中友好協会員、一般の個人をはじめ、将来的に様々な背景を持つ人たちが参加しやすい形のものにするために、当面グループとして会員への拘束力を強めない「ゆるやかなグループ化」をめざしている。支援者個々人の意思や考え方が尊重されやすい反面、グループとして組織だった行動を行う点では非力である。そこで直ちに長期的な支援計画を立てることは避け、メンバー各自がそれぞれの立場で上述の目標を念頭に支援体験を積むこととした。

具体的には「(1)支援リソースを豊かにする方策」として、次のような活動を行った。

- ・市主催国際交流祭で中国関連の展示コーナーを設けるとともに、キーパーソンが支援グループ代表の立場で講演し、帰国者と住民をめぐる地域の課題を訴えた。同時に祭に参加した名瀬市内の国際交流関係グループや個人とも親交を深めた。
- ・プロジェクトの出発時から、地元メディアに働きかけて逐次プロジェクト関連の活動取材・報道を行ってもらい、一般の人々にプロジェクトの意義を伝えた。
- ・「日本語サポーター募集」ちらしを作成し、機会を捉えて配布した。

なお「日本語サポーター」（以下サポーター）はキーパーソンS氏の命名である。従来からの呼称「日本語ボランティア」と対比させる意図を持っている。近隣や職場、学校関係で学習者の身近にいる者が、隣人としての互助的な発想で、可能な方法、可能な範囲で日本語学習の手伝いを行う。日本語の教え方等の支援技能の追求にはウエイトをおかない。

「(2)幼児・学齢の子を持つ婦人を主な対象にした支援」に関しては、次のことを行った。

- ・サポーターの家庭訪問による日本語学習支援
- ・中国帰国者等と地域住民参加の交流会（調理実習、中学校家庭教育学級との交流会）の開催
- ・講師（本調査研究部会メンバー）を招聘してのサポーター入門講座の開催

「(3)高校受験を控えた帰国生徒の教科学習支援」については、サポーターが自宅を開放してあるいは生徒の家庭を訪問して教科補習を行った。

ウ-2.後期（1998年8月頃～1999年1月頃）について

後期は、前期の支援経験を踏まえ、上記(2)の目標に絞り、より安定した支援システム作りの第一歩として所沢からの教材の送付と地元支援者によるスクーリングの併用を試みることにした。

スクーリングを併用した通信による学習支援の実施

目的

学習者に通信学習教材を提供し、学習者の自律的学習を支援する。

- ・日本語サポーターによるスクーリングを併用し、自学自習の援助と生のコミュニケーション機会の増加によって日本語習得を促進する。

内容と手順

名瀬の支援者グループが学習者とサポーター双方の条件のすり合わせを行った上で、3組の学習ペアを考える。スクーリング開始後は必要に応じて、通訳等人材の確保や学習者・サポーター双方からの相談に応じられるように協力体制を維持する。

スクーリング3組は次の通りである。

A組

学習者 : 来日7年目、自学力は比較的高い。日常的な話題での会話は何とかできる。やや複雑な話題になると聞き取り力は比較的よいが発話に自信が持てず、発音文法等の正確さと表現力の向上を求めている。

・サポーター：日本語学習支援経験無し / 中国語不可 / 自宅で英語塾 / 外国籍（中国籍含む）の友人あり

B組

学習者 : 来日11か月、日常的な話題での会話がまだ不自由である。

・サポーター：日本語学習支援経験少々／簡単な中国語の単語レベル可／  
外国籍（含む中国籍）の友人あり

#### C組

学習者：来日7か月、日常的な話題での会話がまだ不自由である。

・サポーター：日本語学習支援経験無し／中国語母語話者（帰国者2世）

#### 通信学習教材の提供

所沢センターがニーズ調査、日本語レベルチェックの結果を参考に、サポーターを介して通信学習教材（自習用、スクーリング活動用）を作成して提供する。

#### スクーリング

サポーターは定期的に、学習者と会って学習上の援助を行う。スクーリングの場所、ペース、時間帯などは事前に話し合っておく。スクーリングの内容については、随時サポーターと学習者間で相談しながら進める。学習者の自習の成果を踏まえた学習活動の他、状況を活かした自然なコミュニケーションが活発に行われるようにする。

#### 支援者に対する相談機能

次のような場合、日本語サポーターは通信手段を介して所沢センターに相談できる。

- ・スクーリングの方法、日本語の質問等、学習者との細部のコミュニケーションを図るために通信を介して通訳してほしい時
- ・スクーリング時の練習方法や学習者からの日本語の質問に対する答え方等についてアドバイスを受けたい時
- ・その他支援上のアドバイスを受けたい時

#### d．結果と課題

##### d-1. 通信学習教材とスクーリングについての結果と課題

#### 自学自習用教材

- ・[ 会話教材（日中対訳音声テープ付） ] <sup>2)</sup>

机に向かって学習できる時間は意外に少ない。家事の合間や余暇時間に聞き流しできる音声テープが好評であった。

・[初級文法教材(中文解説付)]<sup>3)</sup>

数分冊となって、1冊ずつ送付される薄い文法教材は毎回の負担感が小さく、気軽に取り組める上、1冊ごとの達成感も味わえるという点で好まれたようだ。

サポーターとの学習活動用教材

・[ロールプレイ教材]<sup>4)</sup>

課題達成型は「楽しい」と比較的好評であった。ロールプレイのやりとりでは支援者は地元の人ならではの実体験に基づく対応ができた。また日中の違いについて話が進展することもあった。

・[交流教材1(日中対訳音声テープ付)]<sup>5)</sup>

予想に反してあまり活用されなかった。サポーターA、Bは生話題選びやコミュニケーションに長けており、テキストを離れて自由な発想での話題選びを好んだようだ。また学習者自身、聞き流し用としては録音時間が長く語彙や表現がより豊富な会話教材テープのほうを選ぶ傾向があった。

スクーリング

・自学自習が必ずしも容易ではない人もサポーターが学習技能面、精神面で支えることにより、自学自習の方法に慣れてきた。

・スクーリングを当面の目標に、その日に向けて自学自習に一定のリズムや継続性をつけることができた。

・実生活の中でコミュニケーション機会の乏しい人にとっては、コミュニケーション力を鍛錬する実践的な機会となった。(教材を使って学ぶだけではなく、教材を媒体としての生のコミュニケーションを促進することができた)

・実地体験等、生活の現場に付き添ってのサポートに発展することもあった。

・学習者にとってはサポーターを通じて地域での人間関係を広げる端緒ともなった。

・学習者とサポーターのスケジュール変更や学習内容の相談を含め柔軟な対応ができた。

・サポーターにとっても、異文化間のコミュニケーション技能を養う機会となった。

スクーリングについて残された検討事項

・支援者の異文化間コミュニケーション観、コミュニケーション技能、人間関

係を広げるネットワーク力によってスクーリングの効果が左右される。

支援者自身がスクーリング体験を通じて会得できる部分もあるが、必要があれば支援者向け入門講座（遠隔地向けにビデオも含め）の開催を検討する必要がある。

・サポーターによる日本語指導に対する学習者の過度の期待にどう対処するか。

学習者に対してサポーターの役割を十分に説明するとともに、所沢センターの通信による学習支援において学習相談機能の充実を図る。

・サポーターが中国語が堪能な場合のメリット、デメリットを考慮する必要がある。初級者にとっては、母語で自由な質問ができる一方、コミュニケーションの訓練という点ではサポーター、学習者ともに「中国語に出来るだけ頼らない」という意識の切り替えが難しい。

・スクーリングの場として、家庭訪問方式が集会所など比較的広いスペースで複数の組が同時に利用する方式か。

本ケースはすべて、学習者が支援者の家庭で行われた。そのためか個人的関係が深まりやすかった。相性を含む組み合わせの問題と万一トラブルが生じた場合の対処の問題が残る。

#### d - 2 . プロジェクト全体を通しての結果と課題

本プロジェクトにおける「支援手順モデル例」

支援手順モデル例〔表1〕に沿って実行する段階で、地域の実状との調整の結果、手順が前後したり、規模が縮小したりすることもあった。しかし全体的にみてモデルは一つの方向性を示すものとして機能したと考える。

名瀬グループの今後について

ゆるやかなグループ化の実体として、スクーリングの各組が学習体験について相互に交流を深めるために月例会を開くことやコーディネーターを中心とした事務局の機能（サポーター・学習者間の調整、帰国者を含む支援者人材の確保・役割分担など）を安定的に維持できるようにする必要がある。

名瀬の支援者グループの活動はいま第一歩を踏み出したばかりである。今後しばらくはグループとしてのあり方や日本語サポーターの役割の一層の明確化を含め模索が続くものと思われる。

行政等との関わり方について、名瀬の地域性に絡むものと推察されるが、市民の意識や地域のありかたについて行政が住民をリードし、積極的にこれを支援しなければ活動の継続や発展が難しいとの認識が支援者の中にある。そこで今後は日中友好協会や行政からの支援を強めてもらうような働きかけも課題となるであろう。なお所沢センターとしても引き続き通信学習教材の提供や各種相談に対応していきたいと考える。

#### 帰国者等を受け入れる職場や学校の人たちへの働きかけの必要

学習者自身の発言やサポーターからの相談でみえたことの一つに、職場や学校の保護者会など地域社会の中で、帰国者等と接する住民の中には、不完全な日本語を話す人々への戸惑い、時には抵抗感を持つ例がある。相手からそのような戸惑いを感じ取った側は以後コミュニケーションに対し一層消極的になりがちである。地域の住民を巻き込んだスクーリングや交流会が継続・発展していくことを通じて、地域社会の中に一人でも多く異文化間コミュニケーションについての理解者が生まれることを願うとともに、異文化の背景を持った人々が受け入れられやすい地域の環境を作り出すための啓発的活動も求められていると思う。

## 2. 飯田市における「公民館のネットワークを活かした支援の試行」

### a. 支援者支援を行うことになった経緯

飯田市は公民館活動の盛んな地域として知られる。市内には19の公民館があり、それぞれが行政の側面支援を得ながらも、行政から自立した運営母体として、参加住民の自発的意志に基づく活動を行っている。また活動の積み重ねを通じて地域には様々な人材が蓄積されている。所沢センターでは、これら人的・社会的リソースを活用することによって、帰国者等に対する支援活動を活性化できないかと考えた。1997年所沢センターから飯田生生涯学習課のK氏に対して本プロジェクトへの協力を要請し、支援者支援がスタートした。飯田市での種々の取り組みのうち、ここでは竜丘・山本両公民館を活動の拠点とした日本語学習支援の試みについて報告する。

### b. 地域および帰国者等の概況

## 地域の概況

飯田市は長野県南西部の中心都市である。面積は325.35平方km、人口107,000名（1998年現在）。市の中心街の周辺には、鼎（かなえ）、上郷、伊賀良、松尾といった近年ベッドタウンとして発展した地域を抱える。

## 帰国者等の概況

市内の中国帰国者およびその同伴・呼び寄せ家族は209世帯706名である。（周辺の町村には130世帯468名）（1998年9月末現在）

多くは竜丘、山本、伊賀良、松尾の4地区の市営・県営住宅に集中している。呼び寄せ家族の場合、来日後早期に就労し、生活の基盤を築かねばならない状況から、日本語学習に伴う種々の困難が指摘されている。

## 公的学習支援

帰国者等を対象とした日本語学習の場としては、97年9月時点で実施中のものとして県の厚生課が運営している常磐台教室（松尾地区内）が確認されている。

## c. 竜丘地区での試み

### c-1. 竜丘地区の概況および支援者支援を行うことになった経緯

竜丘地区は、帰国者等の集住する長野原団地を有し、1994年度から国際交流会を開くなど外国人居住者と地域住民がふれあう機会を多く作ってきた。地区内に日本語教室がないことから、ある残留婦人より同伴・呼び寄せ家族を主な対象に日本語教室の開設を求める手紙が届き、これを契機に公民館関係者の間で日本語学習支援の気運が高まっていた。97年夏、所沢センターは竜丘公民館の取り組みを支援するために、同公民館にパソコンを設置し、両者の連携・協力関係をスタートさせた。

### c-2. 支援者支援活動の記録

#### ア. 準備段階

##### ア-1. 日本語学級準備会の開催（98年1月）

公民館スタッフ、青年会役員など20余名が参加して、日本語学級開設について協議。はじめての取り組みに対する疑問や不安の声に応じて、所沢センターから講師を招くことを決定。

##### ア-2. 「中国帰国者等について考えてみる会」の開催（98年2月）

所沢センターは支援者（帰国者代表を含む30余名）との協議を通じて帰国者等の概況把握に努めるとともに、次のような趣旨の提案を行い、取り組みの方向性や作業手順を明らかにした。

帰国者やその家族自身にニーズを問うことの意義

・教え教えられる関係を越えて、帰国者等から学ぼうとする視点を持つことの意義

・マンツーマンに対応できる教材の開発が急務であり、所沢センターとして取り組む他、支援者自身にも学習者の状況に合わせたものを作っていく視点を期待

### ア-3. ニーズ調査の実施

#### 調査目的

・日本人スタッフが通訳スタッフを介して地域の帰国者やその家族と知り合う契機とする。

帰国者等の生活面、学習面における概況や問題意識を知る。

調査方法 通訳を介した訪問によるインタビュー

調査内容 資料1参照

調査対象 帰国者等13家族

調査結果のまとめ 調査スタッフの声から

帰国者やその家族の多くは単なる日本語の習得ではなく、地域の生活にとけ込み、住民として地域から受け入れられることを望んでいるようだ。

公民館の企画に対し、スタッフとして協力を申し出る声もあったことから、実施への期待感が持てた。

帰国者やその家族の中には役所や病院で自力で行動ができるようになりたいなど具体的な学習ニーズをいう人もいたが、今回は調査の趣旨として概況把握に努め、細かいニーズを洗い出すことはしなかった。

日本人スタッフからは「実際に訪問したことにより互いに知り合うきっかけができた」「今後一緒に何かをやっていこうという心構えができたことが大きな成果であった。」などと評価された。また「交流の中身は、それぞれの考え方を尊重しあうが、いずれは地域の発展につながる方向にもっていくことが大事だと思う。」という声もあがった。

## イ. 支援計画の立案

### 目的

帰国者とその家族がゆくゆくは同世代の者で組織される「青年団」や「大人の学校」へ参加し、住民として共に地域活動を進めていけるようになることが最終目標である。その出発点として、日本語教室という場を借りて、まず「マンツーマン」「友達になる」をキーワードに、従来からの日本語学習のイメージにとらわれず、参加者が相互に学び合えるような場を作っていこうということになった。

上記の目的を踏まえ、今後の進め方について所沢センターと竜丘のスタッフ間で協議した。所沢センター側からは参加者が対等の立場でスタッフとなり、企画準備段階から共に活動を展開していく「協働プログラム」を提案した。

### 【協働プログラムとは】

例えば交流会等（その他活動内容は自由）を開く際、その交流会の開催された時間を共有するだけでなく、準備の段階から企画作りや種々の作業を含め、住民と帰国者側の双方が話し合っ活動と一緒に作り上げていく。その「協働」の過程で、お互いが言葉や文化の壁を乗り越えていくコミュニケーション能力を高めていくことがねらい。同時に帰国者側にとって日本語学習への一層の動機付けにもなると期待される。帰国者側スタッフの中に日本語レベルの異なる者が数名加わり、取り組みの過程で仲間同士の助け合いも促進されるようにする。

## ウ. 協働プログラムの実施

スタッフ選出会議開催（1998年10月）

...帰国者等を含むスタッフ計14名の選出。

第1回スタッフ会議開催（1998年10月）

...会の名称「好友会（ハオユウカイ）」および第1回料理交流会の開催を決定。

第2回スタッフ会議開催（1998年11月）

...交流会の日程や内容について検討し、帰国者側からの提案に沿って「日本のお正月料理交流会」を12月13日に行うことを決定。

参加呼びかけのチラシ作成、通知

...地区内の日本人や帰国者等の家庭へ回覧や訪問による配布

第3回のスタッフ会開催（1998年12月）

...参加者の集計と当日の段取りについて協議。

料理文化交流会「地元正月料理作り」開催（1998年12月中旬）

参加者：60人（内帰国者等約30名）

活動内容：スタッフ合同で準備作業／餅つき大会／餅を使った各種料理／会食／レクリエーション（日本の歌、中国の歌、百人一首の坊主めくり等）

### c - 3 . 結果と課題

会議を重ねるごとに日本人スタッフと帰国者側スタッフとともに大変馴染んで、活発に発言するようになった。コミュニケーションに対する積極的な姿勢という点では変化が確認できるが、コミュニケーション能力自体の向上について自己評価できるまでには、今後の活動の積み重ねが必要となる。すでに2月中旬に第2回交流会（中国のお正月）の開催を決定し、年明けにスタッフ会議を開く予定である。

協働プログラムの成否の一つは、プログラム全体を通しての参加動機をどう高めるかにある。特に生活に追われる若い層には具体的なメリットがみえやすいほうがいい。文化交流という今回のアイデアは参加のための心理的ハードルを低くするという点では相応しかった。今後は帰国者等が自らの生活に役立つ、あるいは地域生活に不可欠であると認識できる活動を組み込んでいく必要があるだろう。自治会活動や家庭教育学級等での役割分担なども視野に入れつつ、帰国者側スタッフの声を反映した試みを続けてほしい。

気持ちに通じてくるにしたがって、帰国者側から日本語学習の機会を設けられないかという要望が出てきた。支援者の中には「地域には日本語教育の経験者は非常に少ないし、参加住民が『教える』には自信がない。」との声もある。この問題にどう応えるかが現在の最大の課題である。基本的な考え方として、「協働プログラム」を会の柱と捉え、今後も随時実施すると共に、会のクラブ活動として日本語教室の開催を検討する方向に向かっている。すでに所沢センターから教材の提供や指導法についてのアドバイスを行っている。

・「～頁まで勉強した」というような目に見える形での学習方法は達成感はやさしい。協働プログラムの場合、個人差や活動の密度にもよるが、短期間でコミュニケーション力の伸びを（客観的には認められても）自覚することは難しい。従って入門期や初級レベルの若い層など基礎的日本語力を養いたい者や特定の目的の下、集中的な学習を望む者等に対しては、教材を用いた学習の手だてを行いつつ、協働プログラム全体を通してのねらいを繰り返し伝える努力が必要である。

#### d．山本地区での試み

##### d-1．山本地区の概況および支援者支援を行うことになった経緯

飯田市南西の山本地区には、帰国者等の集住団地が2ヶ所あるが、区内の二つ山日本語教室は長く休止中であった。97年秋帰国婦人Oさんから所沢センター宛に「日本語学習を希望する帰国者やその家族が相当数いるが学習の場がない」という趣旨の手紙が届く。98年春飯田公民館のK氏を通じて山本地区の隣の伊賀良地区に住むU氏に支援を打診した。その結果98年9月よりU氏を地元コーディネーターとして所沢センターとの連携の下、「通信による学習教材の送付+集会所でのスクーリング」を試行することとなった。

##### d-2．活動の記録

###### ア．準備段階

ア-1．支援者Uさんによる帰国者Oさんへの状況聞き取り調査（1998年9月）

ア-2．支援者と学習者双方の候補者に対する全体説明会（1998年10月）

・所沢センターより「通信学習教材の送付と地元支援者によるスクーリング」の概要説明

・見本教材の紹介、学習候補者の日本語会話力レベルチェック

ア-3．アンケート郵送方式によるニーズ調査の実施（紀要6号1998平城参照）

###### 結果のまとめ

来日1年以内の人が多い。また日本語学習経験のない人がほとんどである。

学習したという人でも自分で本を見て学んだだけであった。

・乳幼児期や小学生の子供を持つ母親が中心。小学生の子供を持つ母親は平日は働いている。子どもや学校の関わりから学習意欲がかなり高い。

・日本語を使う機会は、仕事で毎日あると答えた人が3人いたが、他の人は

ほとんど話す機会はない。毎日使う人でも会話は非常に困難と言っている。

#### イ．支援プランの立案...「通信学習教材の送付とスクーリング」

目的・内容（本稿40頁参照）

なお名瀬におけるスクーリングとの違いは以下の通りである。

- ・山本地区では集会所を使用して決められた日時にスクーリングを行うので、頻度、時間帯は各組歩調を合わせる。
- ・山本地区では学習希望者と支援者の人数比から、支援形態はマンツーマンと少人数グループの併用である。

#### ウ．通信学習とスクーリング

##### ウ-1．所沢センターより通信学習教材（以下）の送付

- ・「交流教材1（日中対訳音声テープ付）」
- ・「初級文法教材（中文解説付）」

##### ウ-2．第1回スクーリング（1998年11月）実施

場所：二つ山団地集会所　参加者：受講者11名、支援スタッフ6名  
形態：2対1、または1対1での学習　使用教材：交流教材1

##### d-3．結果と課題

#### ア．通信学習教材

- ・「交流教材1」はスクーリングにむけての予習復習用として使われている。付帯した音声テープは好評を得たが、テープレコーダーを持っていない人への対応が必要である。
- ・「初級文法教材」を自学自習で進めていく人がいる一方、自学自習は難しいのでスクーリングで「教えてもらう」ことを期待する声もある。後者には「初級文法教材」に比して難易度の低い「超簡単！知らない間に文法」（本紀要24頁参照）も送付し、学習者の選択にゆだねるようにした。

#### イ．スクーリング

（マンツーマン）

- ・「時には教材を離れた自由な会話に発展させやすいので楽しい」の声がある一方、入門期レベルの人の場合、支援者共々コミュニケーションに慣れ

るまで相当の緊張が伴うようだ。

(グループ)

・日本語レベルの異なる学習者同士で助け合い(通訳など)が促進される。

入門期や初級レベルの人はやや上のレベルの人と組むとリラックスして参加できる。

・教える人が変わるとやり方が違うので、はじめは少し混乱する学習者もいる。

・集会所での一斉スクーリング方式では、時間帯が固定するためペースや時間帯など個人の事情による調整は難しい。

・今のところ参加者が流動的であるため、スクーリングごとに支援者学習者の組み合わせや学習内容の微調整が必要となり、コーディネーターの負担はやや大きい。

学習者のレベルやニーズに細かく対応するという点ではマンツーマンが望ましいように思うが、今後も学習者、支援者からのフィードバックを得ながらよりよい形を模索することになる。いずれにしろ支援スタッフに過重な負担がかからないような、長続きするものを作っていくことが必要であろう。

### 3.まとめにかえて

本プロジェクトでは、様々な通信手段の機能を組み合わせることによって、支援者支援を継続した。(資料2、3参照)地域支援者の事情によりファックスの利用がウエイトを占めたケースと電子メール、電話が主となったケースがあった。また郵便も不可欠の手段であった。

遠隔地の支援者の意識の中で電子メールの簡便さやその意義は十分に理解されたように感じた。今後支援者については電子メールの利用が増えていくものと期待される中、有益な情報が確実に役立てられるためには、支援者支援を行う所沢センターとしても地域支援者のコンピューターリテラシーの育成や向上を図るための具体的なサポート方法の検討も含め、今後考慮していくべきであろう。

支援の内容に目を移すと、本プロジェクトを通じて、地域に暮らす帰国者等の日本語学習にとっては、(1)自学自習の技能を含め日本語の基礎力を養うため

の具体的方策、(2)日本語の運用力を育てたり、自然習得を助ける日常的な言語環境を作り出したりする方策の両面が期待されることが改めて確認できた。

飯田市竜丘地区の「協働プログラム」は(2)にウエイトを置き、名瀬市や飯田市山本地区の「通信学習とスクーリング」の組み合わせは(1)(2)を視野に入れた試みであった。今後も(1)(2)に関わる情報資源の収集整理や開発とともに、これらを地域と共有していくための支援者支援のシステム作りが求められていると思う。

#### 【注】

- 1) 「キーパーソン」とは所沢と地域との連携・協力関係において地域側の直接の窓口であり、人的ネットワーク上の核となる人物をいう。
- 2) 「会話教材」  
面接場面をとりあげ、簡単な自己紹介をしたり、自分や家族のことについて聞かれたりする場合に質問の聞き取りや答える際の助けになるように、基本的な語彙や表現を整理してある。付属の音声テープは日本語と中国語を対比させた部分と日本語だけで聞いてみる部分に分かれており、机上の学習だけではなく、日常生活の中で聞き流し用として利用することもできる。
- 3) 「初級文法教材」  
リーフレット7冊の初級文法教材。基本文型や活用について中国語による解説と豊富な練習問題から成り立っている。
- 4) 「ロールプレイ教材」  
日本語の入門期や初級レベルの人を対象にした中国語対訳付きロールプレイ集。行動プログラム(交通・買い物・職場)と交際プログラム(付き合い、近隣)に分かれている。
- 5) 「交流教材1」  
日本に来たばかりでまだ日本語がよく分からない帰国者と地域の支援者(初めて帰国者と接する日本人)が、交流しながら日本語を学習していくための教材として作成した。教材の内容は、10の項目に分かれており、それぞれの項目は、動機付け/ことばと表現/みほんの会話/自分のことを書きましょう/ヒント/活動/練習/等からなっている。必要と思われる所には中国語と日本語を併記。

#### 【資料1】ニーズ調査案(竜丘版)

内容：1. 訪問の趣旨説明 / 2. 聴き取り項目 / 3. 留意点

「1. 訪問の趣旨説明」は訪問者が中国帰国者に対して行う趣旨説明のポイントをまとめたもの

「2. 聴き取り項目」は、質問紙記入方式のアンケート内容を、訪問調査用に

アレンジしたものです。これはまた、訪問時の会話の流れを示すモデルにもなるはずです。

「3. 留意点」は、訪問調査の前後も含めて留意すべき点をまとめたものです。特に帰国者のプライバシーをまもることに気を付けなければなりません。スタッフをいくつかのレベルに分けて、全体の情報を管理するレベルを特定する必要があるのかもしれませんが。

## ニーズ調査案（竜丘版）

### 1. 訪問の趣旨説明

- (1) 地域の帰国者と一般住民との付き合いをもっと活発にしたい。このことについては、帰国者も同じように考えているのではないかと思うが、どうだろうか。
- (2) お互い顔見知りになることから始めたい。ことばの問題があつてなかなか意志疎通ができないこともあるので、無理がなく長続きするような形で、日本語の学習にもなるような活動にしていきたい。
- (3) どんな活動が可能か、日本語の学習面ではどんな希望があるのかをお聞きして、今後どうするかを決めるための参考にしたい。一緒に作り上げていくことができれば一番いいと思っている。

### 2. 聴き取り項目

- (1) 基本的事項・日常生活の様子について
  - 来日時期
  - 家族（特に子供の就学状況）
  - 外出機会と頻度
  - 近所付き合いの有無 等
- (2) 交流について
  - 日本人の友人はほしいか
    - ...話し相手 / 相談相手 / 趣味の仲間 / 日本語学習の相手 / ?
  - 一緒にやってみたい活動は
    - ...趣味（釣り・園芸・麻雀・カラオケ等） / スポーツ / 見学 / 行事や催しへの参加 / ?
  - 教えてほしいことは
    - ...日本料理 / 将棋 / ワープロ / 日本語 / ?
  - 教えられることは
    - ...気功 / 料理 / 刺繍 / 中国語 / ?
- (3) 日本語について

・日本語使用状況

...使う機会や相手 / 日本人の友人の有無 / 日本語学習歴 今はどんな

勉

強を？

・日本語力の自己判定

...挨拶程度 / 簡単な会話が少し / 簡単な会話なら大体 / 問題なし

...平仮名・カタカナの読み書きは？ / 日本の漢字の読み書きは？

・(日本語で) 困ることはないか

・日本語学習ニーズ

...とてもしたい / したい / 機会があれば / 今はあまり / 不要

...希望する学習条件(場所・時間・頻度)は？

...このために学習したいというはっきりした目的はあるか？

(4) 終結に向けて

地域への要望

その他雑談

### 3. 留意点

(1) 事前の準備

a. フェイス・シートを作成し、目を通しておく

対象者について事前にわかっているものは記入しておく

...氏名、年齢(年代)、性別、家族構成(続柄)、履歴(来日時期、  
学歴、職歴、日本語学習歴、...)、等

統計資料を作る目的ではないので、あまり細かくする必要はない

担当する対象者のフェイス・シートに目を通しておいてから訪問に臨む

b. 通訳者との事前打ち合わせ

通訳者との間で、訪問調査の目的や内容について十分に話し合っておく

c. 記入用紙の作成

訪問後に結果を記入するための用紙を作成しておく

d. 聴き取りの予行演習

訪問者同士で、あるいは家族に協力してもらい、できれば一度予行演習

を

(2) 訪問時の留意点

a. 「調査」というよりも、友好関係作りの第一歩という心構えで

友好的でリラックスした雰囲気作りに努める

...和やかな表情、雰囲気

...相づちや言葉(共感・感想等)を挟む

...一問一答で話題がブツブツ途切れないように

...世間話風に興味に従って自然な流れで話を進める

...相手と視線を合わせて(通訳の方だけを見て話さない)

相手が「調査されている」という感じをもたずに済むように配慮する

- ...尋問調にならないこと
- ...質問を矢継ぎ早に繰り返さない
- ...聞き出すというより、会話の中から知る
- ...その場で記入用紙に書き込まない

但し、一家で何人も対象者がいて覚えきれない状況では目前

で

メモをとることもやむを得ない

すべてを聞き出そうと欲張らない

...質問項目を全部消化する必要はない。是非聞いておいたほうがいい

事

には、できれば聞きたい事にはをつけておいて、それ以外の項目

目

は話題が途切れた時、役立てるメモ程度に考える

b. 質問にはできるだけ本人に答えてもらう

他の家族が代弁した場合も、本人にもう一度確かめておくのが原則

・一族に対象者が複数いる場合、一人聞き終わったら次の人に聞くよう

に

するか、一つの項目毎に各人に聞くようにするか、状況を見て判断する

c. 帰国者からの質問や相談に答えるときには慎重に

・インタビュー中、質問や相談を受けることがあるが、簡単な事項で即答

で

きる場合は別として、返答に躊躇する問題は、後で検討して返事すると

答

えておく

d. 訪問時の会話全体から日本語力を測る

・日本語力を次のような記述で判定し、メモしておく（備考欄に感想を）

...挨拶程度できる / 簡単な会話が少々できる / 簡単な会話が大体でき

る

... / 日常会話全般ほぼ問題ない

...備考：[例] ご本人は「日本語はあまり話せない」というが、こちら

ら

の話しは結構分かっている感じだ

・帰国者本人の自己診断も聞いておく

e. プライバシーへの配慮

・相手が質問をそらそうとしたり答えにくそうにしたら、さらりと納めて

追

求はしない

...帰国者の中には、種々の事情から中国語の識字に困難のある人がい

る

ご  
思  
も  
な  
い  
3)  
(秘  
に  
の  
例  
そ

が、今回は識字力については直接尋ねるのを避ける（必要があれば本人から話されることが多い）  
...例えば年齢を尋ねるべきどうか（中国の人は聞かれても平気だとは  
うが、相手が平気ならいいのだろうか）。統計資料を作るのでなく、  
交流会準備で参考にする程度なら、訪問者の印象で「～才代位」で  
かまわないかもしれない  
・家の中をじろじろ見回したりして相手の生活の様子に過度に興味を示さ  
ない

### 3) 事後の作業と留意点

訪問時の会話の内容をわすれないうちに記録

...聴き取り内容や印象についての記憶は消えてしまったりあやふやにな  
ったりしやすい。次の家庭を訪問する前に、別の場所ですばやく  
まとめておく

・入手情報の管理をきちんとする

...調査上知り得た個人の情報をどのように活用し、どのように管理

（秘  
密保持）するかは倫理上の問題ともからむので、特に注意！むやみに

口外してはならない

地域活動に関わる調査では、被調査者の個人的な情報が地域

住民に皆知られてしまい、「丸裸にされてしまった」という事

もある

...全体でシェアしてもよい情報（交流会企画に直接関わるもの）と

そうでない情報を区別し、後者については責任者がきちんと管理する

【資料2 通信手段を用いて流通した主な情報】

#### 所沢センター発      地元支援者

##### (1) 支援先行地域の情報

学習支援活動記録ビデオ / 日本語ボランティアグループ機関紙からの  
抜粋

郡山日本語ヘルパー育成講座ビデオ / 学習支援事例情報

##### (2) 各種教材: 学習プログラム

通信学習教材 / 学習プログラム / 教材リスト (ビデオ教材を含む) / 教材

・辞書の入手方法に関わる情報

- (3) 各種相談・問い合わせに対する回答・助言  
ニーズ調査に関わる事項 / 支援プラン作成に関わる事項 / 支援活動に関わる事項 / 通信学習に関わる事項
- (4) 評価に関する情報収集 (各種アンケート)

地元支援者発 所沢センターへ

- (1) 地域の状況分析に必要な基礎情報
- (2) 活動現状報告
- (3) 各種相談・問い合わせ  
組織作りに関わる事項 (助成金情報 組織作り事例) / 日本語教室情報  
学習相談 (教材や支援内容、支援に関わる悩み迷い)

郡山班コーディネーター 通信学習の支援者

- (1) 各種教材・学習プログラムの提供
- (2) 各種相談・問い合わせへの対応
- (3) 評価に関する情報収集 (各種アンケート)

【資料3 各種通信手段の使用感】

	主な利用範囲	メリット	デメリット
郵便	<ul style="list-style-type: none"> <li>通信学習教材等量的にかさばる物の送付</li> <li>学習者、支援者への各種アンケート（返信封筒付き）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ビデオ、音声テープを含め大抵の物が送れる</li> <li>機材を必要としないので誰でも可</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>荷造り、送付手続きの手間</li> <li>日数がかかるため受け手を待たせる</li> </ul>
ファックス	<ul style="list-style-type: none"> <li>通常の連絡</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>操作が簡便</li> <li>手書きなどデジタル化されていない生資料や写真、絵入りが送れる</li> <li>比較的受け手の目に触れやすく受信反応が速い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大量の情報送付ははばかれる</li> <li>機種によっては受信画像が不鮮明なため、ルビ付き教材等は不向き</li> <li>加工利用ができない</li> </ul>
電子メール	<ul style="list-style-type: none"> <li>通常の連絡</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>操作に慣れた者には簡便</li> <li>データとして保存整理が便利</li> <li>加工し再利用できる時間を拘束されない（相手が不在でも送れる）</li> <li>自分の時間があるときに受信できる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>操作に習熟するまでサポートが必要</li> <li>メールサイズ（一行文字数）を超える物は加工の必要</li> <li>印刷物をデジタル化する手間</li> <li>受け手がいつ受信するかわからないため急ぎの場合は電話で送信した旨連絡の必要</li> <li>受信チェックもこまめに行う必要</li> </ul>
電話	<ul style="list-style-type: none"> <li>緊急の問い合わせ相談</li> <li>スクーリング現場からの質問</li> <li>アンケートに代えでのインタビュー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほとんど誰でも備えている</li> <li>インターアクションで短時間に話の進展が図れる</li> <li>微妙なニュアンスを含め受け手の反応を確認できる</li> <li>文章化の手間がなく手軽に情報交換できる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手の不在や時間的都合によって“いつでも”が制約をうける</li> <li>記録が残らないため、重要な事柄はメモの必要</li> <li>熟慮して返答したい内容には不向き</li> <li>長距離の場合のコスト</li> </ul>